

# 主日礼拝説教「神の言葉があなたを惑わし、生かす！」(予稿)

日本基督教団石神井教会 2017年8月20日

## 【旧約聖書日課】エレミヤ書 20章7～13節

- 7 主よ、あなたがわたしを惑わし、わたしは惑わされて、あなたに捕らえられました。  
あなたの勝ちです。わたしは一日中、笑い者にされ、人が皆、わたしを嘲ります。
- 8 わたしが語ろうとすれば、それは嘆きとなり、「不法だ、暴力だ」と叫ばずにはいられません。  
主の言葉のゆえに、わたしは一日中、恥とそしりを受けねばなりません。
- 9 主の名を口にすまい、もうその名によって語るまい、と思っても  
主の言葉は、わたしの心の中、骨の中に閉じ込められて、火のように燃え上がります。  
押しえつけておこうとして、わたしは疲れ果えました。わたしの負けです。
- 10 わたしには聞こえています、多くの人の非難が。  
「恐怖が四方から迫る」と彼らは言う。「共に彼を弾劾しよう」と。  
わたしの味方だった者も皆、わたしがつまずくのを待ち構えている。  
「彼は惑わされて、我々は勝つことができる。彼に復讐してやろう」と。
- 11 しかし主は、恐るべき勇士として、わたしと共にいます。  
それゆえ、わたしを迫害する者はつまずき、勝つことを得ず、成功することなく  
甚だしく辱めを受ける。それは忘れられることのない、とこしえの恥辱である。
- 12 万軍の主よ、正義をもって人のほらわたと心を究め、見抜かれる方よ。  
わたしに見させてください、あなたが彼らに復讐されるのを。  
わたしの訴えをあなたに打ち明け、お任せします。
- 13 主に向かって歌い、主を賛美せよ。主は貧しい人の魂を、悪事を謀る者の手から助け出される。

## 【使徒書日課】使徒言行録 20章17～35節

17 パウロはミレトスからエフェソに人をやって、教会の長老たちを呼び寄せた。18 長老たちが集まって来たとき、パウロはこう話した。「アジア州に来た最初の日以来、わたしがあなたがたと共にどのように過ごしてきたかは、よくご存じです。19 すなわち、自分を全く取るに足りない者と思い、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた試練に遭いながらも、主にお仕えしてきました。20 役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました。21 神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証してきたのです。22 そして今、わたしは、「霊」に従われてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。23 ただ、投獄と苦難とがわたしを待ち受けているということだけは、聖霊がどの町でもはっきり告げてくださっています。24 しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。

25 そして今、あなたがたが皆もう二度とわたしの顔を見ることがないといわたしには分かっています。わたしは、あなたがたの間を巡回して御国を宣べ伝えたのです。26 だから、特に今日はっきり言います。だれの血についても、わたしには責任がありません。27 わたしは、神の御計画をすべて、ひるむことなくあなたがたに伝えたからです。28 どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなされた神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なされたのです。29 わたしが去った後に、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、わたしには分かっています。30 また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます。31 だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。32 そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。33 わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。34 ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。35 あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すように、わたしはいつも身をもって示してきました。』

## 【福音書日課】 マタイによる福音書 10章16～25節 (朗読なし)

<sup>16</sup>「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。<sup>17</sup>人々を警戒しなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で鞭打たれるからである。<sup>18</sup>また、わたしのために総督や王の前に引き出されて、彼らや異邦人に証しをすることになる。<sup>19</sup>引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない。そのときには、言うべきことは教えられる。<sup>20</sup>実は、話すのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる、父の霊である。<sup>21</sup>兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。<sup>22</sup>また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。<sup>23</sup>一つの町で迫害されたときは、他の町へ逃げて行きなさい。はっきりしておく。あなたがたがイスラエルの町を回り終わらないうちに、人の子は来る。<sup>24</sup>弟子は師にまさるものではなく、僕は主人にまさるものではない。<sup>25</sup>弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である。家の主人がベルゼブルと言われるのなら、その家族の者をもっとひどく言われることだろう。」

### 「平和の使者」としての任務

今年も8月15日を迎えました。皆さんも、それぞれの思いのうちに、この季節の特別な祈りを導かれていらっしゃるのではないでしょうか。わたしも、終戦2カ月前にフィリピンで戦病死したという祖父についての個人的な記憶に促されながら、今の時代に生きる自分自身の立ち位置、大げさに言えば、命をかけて果たすべき自分に与えられた務めについて、あらためて問われる思いを与えられながら、この季節の祈りを重ねて過ごしてきました。

朗読を省略しましたが、今日の福音書日課(マタイ 10:16~25)の御言葉は、主イエスが「わたしはあなたがたを遣わす」と告げられるところから始まっています。主イエスは、ご自分に従う者を、「狼の群れに…送り込むよう」にして遣わされる、というのです。それは、人々の中で証しをするためですが、そのときに言うべきことは、心配しなくても、御父の霊が教えてくださって、あなたがたの中で語ってくださるだろう、というのです。何とも不思議なことを約束される主イエスですが、そのような形で主イエスが従う者たちを遣わされるのには、もちろん、一つの目的がおありでした。端的に言えば、遣わされた者たちが、遣わされた先で、人々に平和をもたらすためです。直前の箇所では、主イエスは、ご自分の遣わす者たちが、行った先々で、いわば「平和の使者」としてふるまうようにとお教えになられていました。すでに仲間であるかどうかにかかわらず、まずは行った先で「平和があるように」と挨拶をして、自分のほうから相手に平和を与えるように行動しなさい、というのです。そのような「平和の使者」として「あなたがたを遣わす」とおっしゃられた主イエスは、ご自分に従うすべてのキリスト者を同じようにこの世へと派遣し続けてくださっているのです。

使徒パウロは、最初の教会の時代に、主イエスが遣わしてくださるということを一歩真剣に受け止めた一人でしょう。使徒言行録は、その後半のほとんどを割いて、そのパウロの遣わされた先での働きを伝えています。もちろん、その時代にキリストに遣わされた者として宣教に仕えたのはパウロ一人ではありませんでしたが、パウロほど、その務めを深く自覚し、自分自身のもので受けとめ、また信仰の友らに身をもって証した者は、多くはなかったのでしょうか。

## 神の恵みの御言葉

使徒言行録の日課箇所は、パウロが諸教会で募った献金を携えてエルサレムの教会に赴こうと、出航に備えていたときに、エフェソの教会の長老たちに別れの挨拶、最後の勧めを語ったときの出来事を伝えているところです。パウロは、このとき、エーゲ海を挟んで、ギリシア（フィリピヤコリントなど）と小アジアを行き来しながら、エフェソをはじめとする町々でも活動していたのです。エフェソの教会は、パウロが開拓伝道した教会ではありません。すでに他の伝道者が働きを始めて、信仰の種がまかれ、洗礼を受けた弟子たちの集まりが始まっています。ところが、その弟子たちは、まだ聖霊の働きを知らなかったのです。そこでパウロは、彼らエフェソの弟子たちに、聖霊の働きを伝えました。それはつまり、使徒の教え、相互の交わり、パンを割くこと、祈ること（使徒 2:42）というような教会の営みが整えられることだったのでしょう。パウロの指導によって教会の営みが整えられたエフェソの教会の人々は、パウロとの間に特別な信頼関係を築いていたのでしょう。それは、心情的に離れがたいようなものでもあったようで、今日の日課箇所の直後のところでは、このときにパウロのもとに呼ばれたエフェソの長老たちが、皆激しく泣きながら別れの接吻をした様子が伝えられています。

このときのパウロの言葉は、しかし、その別れを惜しんだり、後ろ髪引かれる思いを述べたりするようなものではありませんでした。ただ、自分が命をかけて為してきた「**神の恵みの福音を力強く証しするという任務**」を思い起こさせること、そして、そのことを身をもって示してきたように、あなたたちにも受け継いでもらいたい、その務めを、困難にひるむことなく、果たしてもらいたい、ということ、パウロは語り勧めたのです。

この勧めの中で、パウロは、三度、「**そして今**」と告げて語っているところがあります（22 節、25 節、32 節）。今、このときの別れのときが、どのような意味を持っているのか。そのことを問う言葉でしょう。最初は自分のことを、二度目は自分とエフェソの人たちとのことを、そして最後には、エフェソの人たちのことを語っています。その最後の「**そして今**」で、パウロは言いました、「**神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なるものとされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです**」と。

説明するまでもない言葉でしょう。エフェソの教会の人たちだけでなく、わたしたちに語られた言葉として、心に染み入る御言葉だと思います。何よりも、パウロの意図を考えるならば、この言葉は、わたしたち教会に招かれたキリスト者同士の関係を基礎づけるものとも言うことができるでしょう。「あなたのことは、わたしが何かして差し上げることはありません。神と神の恵みの御言葉にゆだねています。御言葉が、あなたを恵みのうちに造り上げてくださるのです」。そのような関係の中で交わりを持ち、ただ御言葉を贈りあうことの中で信頼関係を育てていくことができる。パウロは、そう教えているのではないのでしょうか。

## 惑わされるほど近くで、骨の中まで明け渡して

わたしたちの中で、だれも異論はないでしょう。お互いのことを、神にゆだね、神の御言葉にゆだねる。そのような思いを、互いのために祈り合う。わたしたちが、教会の交わりの中で、すでに重ねてきたことです。

ただ、パウロがこの言葉を語ったとき、エフェソの教会の人たちは、もしかすると、わたしたちが考えているほど単純に、この言葉を受けとめはしなかったかもしれません。それは、パウロが、自分自身の任務として力強く証してきた「**神の恵みの福音**」と呼ぶ御言葉が、パウロのことをどれほど苦しみ、困難に陥っていたのかを、エフェソの教会の人たちは、知っていたからです。それだけではありません。パウロは、間違いなく神の恵みの御言葉に促されて、今、エルサレムに向かおうとしていました。しかし、それは、**投獄と苦難**が待ち受けていることだと、パウロもエフェソの教会の人たちも、分かっていたのです。

**投獄と苦難**。それは、しかし、パウロ一人のことを意味して取り上げられた言葉ではなかったかもしれません。旧約の預言者たちも、しばしば、御言葉の預言をすることによって、投獄と苦難の中に置かれたのです。その代表格は、今日の旧約日課でその告白を聞いたエレミヤでしょう。

エレミヤは、若くして預言者として召され、御言葉に仕える生涯を送りました。しかし、それは職業的な意味で預言活動をした、ということではありません。エレミヤは、言ってみれば、いつも嫌々ながら預言者として預言を語っていたのです。エレミヤは、自分が神の御言葉を預言して語っても、人々が聞き入れてくれないことに行き当たって、悩みを深くしていました。そればかりか、自分自身の心の思いが神の御言葉と衝突する思いさえも、抱くようになっていったのです。「**主よ、あなたがわたしを惑わし、わたしは惑わされ、あなたに捕らえられました**」とは、考えてみれば、預言者らしからぬ言い方です。「**主の言葉のゆえに、わたしは一日中、恥とそしりを受けねばなりません**」と、エレミヤは神に不満をぶつけ、侮辱的な言葉さえ浴びせているのです。人々が御言葉を受け入れないという現実の中で、エレミヤ自身も、神の御言葉を素直には受け入れられない者として、自分を見つめているのです。

それは、預言者エレミヤ一人の苦悩ではなかったでしょう。使徒パウロもまた、そのような苦悩のときを過ごしながら、なお、使徒として宣教活動を続け、教会の人々に語り続けたのです。パウロが手紙の中で告白した思いを、いくらでも挙げることができます。けれども、御言葉がたとえ、自分の思いと違えるものとして迫ってきているとしても、自分の思いを惑わすものであっても、なお、そのみ言葉が、自分の心の中深くに、骨の髄の中にまで、閉じ込められ、離れることなく語り始めている。そう、エレミヤもパウロも、語ったのです。そう語るしかないほどに、自分自身を神の御言葉の前に明け渡していたのです。

「**そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます**」。「御言葉を、あなたがたに」ではありません。「御言葉に、あなたがたを」です。御言葉が、わたしたちのすべてを露わにし、この命の務めをもお示しくくださるのです。